

人生の贈り物の わたしの半生

「DとK」別々だった人事 必死で一体化

作家

江上剛(61)

7

——結婚は梅田時代で、母親どうしが知り合いで、見合いです。可愛いなと思いました。向こうはピンとこなかったようですけど、そのころ大阪は住友と三和が強くて「第一勧業銀行です」と言っても通じない。「勸」の字を正しく書いてもらえなかったんです。だから営業が忙しくてテロトもできない。まあ遅くまで遊んでいたこともありましたがね。

それに転動があることも、女房には不安だったようです。結婚して、ある融資案件で責任を問われたとき、「うん」になるかも知れないよ」と言ったら、「いいじゃない」と辞めちゃえ、辞めちゃえ」と言ったほどです。

——最初の転動で東京、芝の支店ですか。

梅田支店で鍛えられましたから、東京は楽だなと思いましたが、大阪で「考えときました」と言われたら、拒否の意味です。でも東京の人は、本当に次までに考えていてくれる。新規開拓のチームに入りました。営業がうまくいきましたが、1980年代で東京湾岸の開発が活発になっていったんですね。この新規開拓チームで上司になったのが、後に総会屋利益供与事件の対応で一掃にがんばるようになる後藤高志さん(現西武HD社長)です。よく麻雀をしましたが、後藤さんは大変な負けず嫌いで、なかなか帰れませんでしたね。

——本店には85年に。そうですね。まず業務本部総評価をする。関東とも大本营とも言われた大きな権限がある部です。このころ銀行が融資に目標を設定するようになったんです。それまで目標といえは預金の獲得目標だったのが、競いあって貸し付けられるようになる。パブルです。

次が業務開発部、市場金利連動型預金(MMC)導入が始まる金利自由化の時期ですが、銀行協会の会長だったので、当時の大蔵省銀行局との窓口を担当しました。業界の利害をまとめて大蔵省と調整する仕事です。

証券業との垣根争いもありましたね。証券が銀行預金と競合するような安全性が高い中期国債ファンドを出したのに対抗して、定期預金の金利分を株価指数先物で運用する商品が作れないかと検討したこともありましたよ。新聞に出たら大蔵省に文句言われて、つぶされました。

——そのあとが人事部。ええ、このとき、うしろや支店長以下的人事を一体的にできるような事を、それまでは合併から約四半世紀たっているのに、第一系(D)と勸銀系(K)で別々に動かしていた。これは自由化のスピードに対応できないという危機感があって、後藤さんらと一緒に必死でやりました。僕は入行時点でKと分類されていたので、業務本部総括部時代に屋敷をのりの人と行くと、それだけでK人脈から叱責されました。悔しくてね、親父に「こんなお茶くみみたいなとこ行ってんだ」と電話で愚痴ったら、「そのお茶くみのおかげで、おまえ給料もらってんだ」となだめられましたよ。

——聞き手・小林伸行 11会10回



新婚旅行のニュージラランドで。忙しい毎日の中、結婚式は比較的新しい仕事に余裕のある月に挙げた

人生の贈り物の わたしの半生

総会屋問題 薄い危機意識に憤り

作家

江上剛(61)

8

——1994年6月に第一勧業銀行(DKB)の本店広報部次長に異動。総会屋利益供与事件という未曾有の事態に遭遇されます。銀行と総会屋の関係について危機感を持ったときだとすね。

——聞き手・小林伸行 11会10回

——1994年6月に第一勧業銀行(DKB)の本店広報部次長に異動。総会屋利益供与事件という未曾有の事態に遭遇されます。銀行と総会屋の関係について危機感を持ったときだとすね。

——聞き手・小林伸行 11会10回

——1994年6月に第一勧業銀行(DKB)の本店広報部次長に異動。総会屋利益供与事件という未曾有の事態に遭遇されます。銀行と総会屋の関係について危機感を持ったときだとすね。

——聞き手・小林伸行 11会10回



総会屋事件のときは、新聞記者が連日自宅を夜討ち明け「家にあびて話をしましたが、女房はさすがにまいってしまっって、苦勞をかけたよ」

——聞き手・小林伸行 11会10回

人生贈りのわたしの半生

作家 江上剛(61)

9

毎月100枚 期日守り小説家に



高田馬場支店長のとき、仕事始めで記念撮影(右から入目)。副支店長、振替抽票の行員らと

——総会議事件の対応で成果を上げていた1999年、新たな統合話が、事件を受けて第一勧業銀行(DKB)は確かに変わった。その意図がしつこく押しつた。そうしたら今度は富士銀行、日本興業銀行と事業統合して、みずほ銀という話になった。それはそれで経営判断でしようから僕が何か言うことではないけれど、気をつけないとD(第一)とK(勧業)のような権益争いが、また繰り返される恐れがあると思う。現実には統合時にはオンラインシステムがダウンしてしまっただけで、そのシステムが一番良いかという合理的判断より、自分たちのシステムを採用したいという意識が先に立ったのが、一因だったと僕は思う。

——失望しましたか。

当時、僕は本店を離れ、支店長をやっていたけれど、文壇でやってるのは権益争いの話ばかり。経営も思わしくなくて、02年の暮れに大型増資の計画が出ました。本店に各支店長が集められ、出資を集めるような恫喝のような調子で言われるんです。これが決定的になって、翌年1月の早期退職募集に応じました。49歳。家には女房と大学生の息子、それに猫一匹。もちろん不安はありましたが、辞めるも決めた瞬間、気持ちがあつと楽になりました。

——既に小説を書き始めていたんですね。

本店を離れてから「フツフツ」言っている。女房に「このままじゃ、ぬれ落ち葉になっちゃうから何かやんなさい」と言われちゃって。新聞社のカルチャーセンターをのぞいたら、たまたま小説講座の空きがあった。そこで銀行員の経験をもとに書いた短編が知人を通じて編集者の目にまわり、雑誌にのったんです。すると今度は編集者が「これを長編小説の第一章にしよう。毎月100枚、合計十枚書いてください」といって、銀行員ですからね、期日は守る。きっちり1千枚渡したら、「いらないから返してください」と言われまして、それが「ユーリ」の「非情銀行」です。ユーリ——ものを書くのは何十年ぶりですよ。

——社会に出てからは初めてです。小説時代、井伏鱒二先生に「小説はいつでも書ける。人生の経験が積み重なると書かれますが、その通りには、あれは僕じゃないか」という噂も出ましたが、「いや、あいつなら、もっとドドドドした内容になるはず」という人もいましたね。

銀行を辞めたとなったら大勢の人から「こんな面白いときに辞めるのはどう」と言われました。良い転職先があるのだから、勘へえ入もいた。ところが僕が「小説家になるんだ」と言っただけで、どちらか本気だと思わなかった。買置気がガラツと変わった。それは大変なこと。一時は激しい視線を投げかけていた支店の女子行員は「がんばって下さい」と言っただけで、本にサインを求めてくれませんでした。

(聞き手・小林伸行) 10月10日

本人提供

人生贈りのわたしの半生

作家 江上剛(61)

10

大会社という伏魔殿 問い続ける



今月12日の東京マラソンに他の参加者(左端)。マラソンは、友人知らずのランナーどうしがたちまち10年先の友のようになれる不思議なスポーツです

——小説家として活躍を続けられる中、2004年中小企業融資に力を入れる日本振興銀行の社外取締役就任されましたね。

前にもお話ししたように、かつての銀行は預金量の目標は作っても、融資に目標を設定するようなことはなかった。それがバブル期になると、やみくもに貸し付け競争に走り、それがはじけると、今度は一転して貸し取り、貸しはがして融資先を苦しめて。中小企業にとっては死活問題です。子どものころ、商売で苦労する父親の姿を見ていて、資金繰りの大変さは分かっているつもりです。また銀行の支店長をやっていたときも、中小企業への資金供給の厳しさは感じていました。

「手伝ってられないか」と言われて、自分でできることから協力しようと思いました。

——それが徐々に経営内容が厳しくなり、金融庁の検査最悪容疑で経営陣が審判院に逮捕され、自ら社長就任を迫られる。最終的に銀行は債務超過で持ちこたえられず、日本初のペイオフ発動になってしまいました。

他の関係者のこともあって、申し訳ないけれど、今お話しできることは少ない。ただ経緯はどうあれ、ペイオフで預金者に迷惑を掛けたことは事実です。

——今月刊行された抗争は再び舞台が銀行です。私が辞めた後も、金融業界には反社会的勢力とのつながりなどの問題が絶えない。そうした銀行界の現状を描きました。でも銀行だけじゃないんです。各産業分野で、大会社という伏魔殿は様々な問題を起し続けている。なぜそうなるのか、人も企業も、そもそも自分たちは、何のために社会に存在するのかという原点を忘れないことが大事なんだと思います。

(聞き手・小林伸行) 10月10日

本人提供